

あるむぜお96

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 96

2011年6月20日



撮影：影山昇

目次

- 1-2 渡り鳥ってナンダ？
①鳥はどうして“渡る”のか？
- 3 展示会案内
特別展 縄文土偶のナゾをさぐる
- 4 展示会案内
企画展 蓮の画帳
- 5 最近の発掘調査
沖積低地で新たに弥生土器を発見！
- 6-7 ノート 173年ぶりの金環日食
- 8 知る人ぞ知る！府中ゆかりの人物
①矢島藤八郎
- 9 平成22年度資料受入れ、利用状況報告
- 10 収蔵資料あれこれ 団地びな登場

身近な自然を再確認する目的でスタートした展示会「あしもとネイチャーワールド」シリーズの次回(来年1～3月)テーマは渡り鳥を予定しています。本誌の表紙では、府中で観察できる冬鳥の代表種を市内在住の影山昇氏(府中野鳥クラブ)の写真で4回にわたり紹介します。

冬鳥図鑑① ツグミ

郷土の森園内に一番多く渡って来る冬鳥はツグミです。芝生などの緑地で、小さな虫や植物の種をあさっている様子が見られます。日本に数多く来訪する鳥で、非常に美味ということから、昭和の後半までカスミ網による捕獲が行われていました。長距離移動の蓄えとして、相当の脂肪がのっていたのでしょう。人々の貴重なタンパク源だったというわけです。



渡り鳥ってナンダ？



① 鳥はどうして“渡る”のか？

“渡り鳥”と言えば、転々と住み場を変える苦勞人や、フーテンの寅さんのように旅から旅へと落ち着かない者の形容に使われることもあります。もともとは“渡り”という大変特徴的な生態行動を持つ鳥類を総じて呼ぶ時の名称です。

鳥が海を渡る、山を越えて来る…そもそも同じ脊椎動物に属するどの種族も持ち合わせていない、翼という部位を駆使して大空を自由に飛べるからこそその行動と考えられますが、何故に彼らは“渡る”という体力勝負に出るのでしょうか。

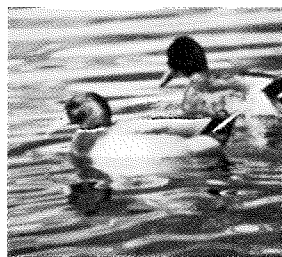
当館の園内や周辺地域で注意深く観察すると、年間を通して見られる野鳥の他に季節によって姿を現す鳥、消える鳥の存在に気がきます。春から夏にかけて南方からやって来るのは、ツバメや



ツバメ

カクコウのように繁殖のため日本を訪れる夏鳥、逆に秋から冬にかけて日本にやって来るのは、カモ類やツグミのように越冬のため北方より飛来す

る冬鳥です。日本に生息する野生鳥類の4分の3に相当する約4,000種が、太平洋・北米大陸・ロシア・東南アジア諸国などを渡るといわれますが、繁殖地と越冬地を正確に移動する行動を毎年繰り返すものを“渡り鳥”と呼んでいます。夏鳥は、南で冬を越し、温暖な場所で産卵・育雛を行います。冬鳥は、北で繁殖し、寒い季節はより暖かい地域で冬を越そうと南下します。従って、ここで言う夏鳥・冬鳥は、あくまで日本を基点とした呼称です。また、シギやチドリの仲間では、シベリアから東南アジアに移動する際の休憩地と



マガモ

して日本を利用しますが、この場合の呼び名は旅鳥と言います。

正式には渡り鳥ではありませんが、日本国内で、山地と平地を行ったり来たりする漂鳥、ひとつの地域内から動かず、近距離移動のみの留鳥がいます。但し、狭い範囲での移動を伴い、留鳥でありながら冬に北海道あたりから集団で暖地に渡って来るヒヨドリのように、広い意味で渡り鳥とも思える種類もいます。

人類より遙かに古い歴史を持つ鳥類が、いつから渡りと言う行動を始めたのかは、定かではありません。翼を持ち、強い飛翔能力・移動能力を発揮することで生息域を広げ、やがては広範囲に移動する生態を持つに至ったのではないかと推察されます。鳥の翼と同様に、水中を自在に泳げる鰭を持つ魚が大海を回遊するように、翅を持ち至る所に生息域を広げていった昆虫のように、まさにその種族が持つ特徴的機能がそれぞれ動物の生態行動を決定付けているのかも知れません。

19世紀になって、繁殖地に集まる鳥の脚に標識を付け、行き先を追跡する手法が導入されると、徐々に渡りの研究が始まりました。結果、研究者によるいくつかの仮説の中では、繁殖地が季節変化で暮らしにくくなると、効率良く餌の採れる場所に移るといった食料説が一般的です。日本で繁殖する昆虫食の夏鳥は、昆虫の急減する冬場に餌の豊富な南へ、北極圏で繁殖する冬鳥は、雪や氷に閉ざされ餌も採れない環境を離れ、越冬地として日本に飛来するというわけです。他説には、氷河時代に食料を求めて移動が始まり習性化したとする氷河説、大陸移動と共に渡りを始めたとする大陸移動説などがありますが、果たして真実は…。

餌の問題は、確かに渡り行動の最大要因と考えられますが、そこに長い年月と複数の何かが重なったからこそその習性にも思えます。体力を消耗し、何千、何万kmに及ぶ長旅を続けるメリットが、きっと他にもあるような気がしてならないのです。

(中村武史)

じょうもん どうぐ

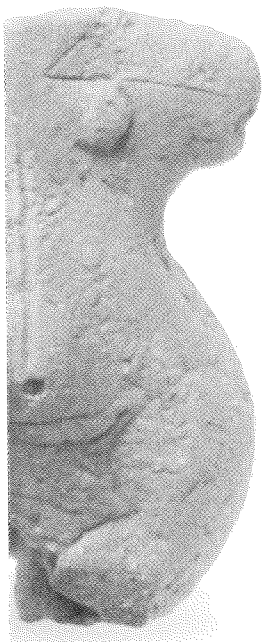
縄文土偶の ナゾをさぐる

展示会案内



特別展「発掘！府中の遺跡
—縄文土偶のナゾをさぐる&調査速報」

2011/7/16日～9/4日



どうぐ、それは縄文時代を象徴する遺物の一つです。イギリスの大英博物館で「THE POWER OF DOGU」と題した展示会が開かれたのは2009年のこと。今や土偶は「DOGU」として国際的にも広く知られた、日本の原始社会を代表する考古学資料になったといっても

よいでしょう。

日本列島での土偶の出土は、現在1万5000点を超すといわれています。いかにたくさんの土偶たちが、縄文時代につくられ、使われたのかがわかります。

しかし土偶は、縄文時代の遺跡からかならず出土するような、ポピュラーな遺物では決してありません。土偶を出土する遺跡は、縄文遺跡全体から見ればわずかなのです。

そしてまた土偶は、大きな謎につつまれた遺物でもあります。縄文人の精神世界や信仰に関わる道具であることは容易に想像できるものの、具体的に、何のために、どのように使われたのか、といった問題については、さまざまな考え方が提出されていて、見解の一致には達していないのです。

さて、府中市の西府町と本宿町にまたがる縄文遺跡である本宿町遺跡では、縄文時代中期、およそ5,000年前の土偶がこれまでに30点出土しています。多摩川沿いの遺跡の中では土偶をたくさん出土した遺跡といえます。今回の展示会は、この本宿町遺跡から出土した30点の土偶を、じっくりと観察していただきたいと思い企画いたしました。土偶の顔、頭、体にどんな特徴があるのか、どんなつくられ方をしているのか、どんなふうに出土したのか。こうした点を見ていくことによって、縄文人たちの土偶に対する思いを感じることができるとはいえ、そんな試みです。

また、多摩地方を代表する土偶たちもあわせて展示します。多摩地方の土偶の地域的な特色、時代的な変化も同時にご覧いただきたいと思えます。

府中市内で昨年度実施された発掘調査の成果も、ダイジェストで紹介します。

(深澤靖幸)

写真はいずれも本宿町遺跡出土品



企画展 蓮の画帳

～博士の研究用具～

6月25日(土)～9月4日(日)

会場：本館2階企画展示室
観覧無料

毎年ハスの花が美しい時期に、当館が所蔵する大賀一郎博士の遺品から、ハスに関する資料を中心に展示を行っています。

大賀博士は、1883年（明治16）に現在の岡山県岡山市で生まれました。1909年（明治42）東京帝国大学理科大学（現 東京大学理学部）を卒業した後、満州（中国東北部）や欧米で植物の研究を行いました。

帰国後、1944年（昭和19）に東京農林専門学校（現 東京農工大学農学部）の講師を委嘱されたことと、翌20年に住んでいた淀橋区上落合（現新宿区）の住居が戦災で焼失したことから、府中町新成区（現府中町1丁目）に転居しました。その後、1953年（昭和28）に本町5丁目（現寿町2丁目）に移り、そこで82年の生涯を終えましたので、晩年の20年間を府中で過ごしたことになります。その間、文化財専門委員としてケヤキの保



蓮の葉と大賀一郎博士

護にも尽力しています。

大賀博士がハスの研究を始めたのは、東京帝国大学在学中の頃です。卒業論文はアサガオに関するものでしたが、卒論研究と平行して、ハスの開花受粉から受精までの時間をはかるように指導教授から言われたことがきっかけでした。卒業後、ハスの実の生存年数に関する研究に取り組み、検見川（千葉県千葉市）の泥炭地から発掘した古ハスの実を1952（昭和27）に開花させました。これが、現在いろいろな場所で見ることのできる大賀ハスです。

今回は、博士が集めたハスの色彩画と使用した研究用具を紹介します。その中には多数の試験管や薬瓶のほか、土壌の酸度を測る「酸度盤」や「天秤ばかり」などがあります。興味深いものとしては、ガラスではなく磁器で作られた「三角フラスコ」や「丸型フラスコ」があり、これらは戦時中につくられた代用品かもしれません。

このほかにも、「大賀博士写真館」と題して博士の写真パネルを多数展示する予定です。

（花木知子）



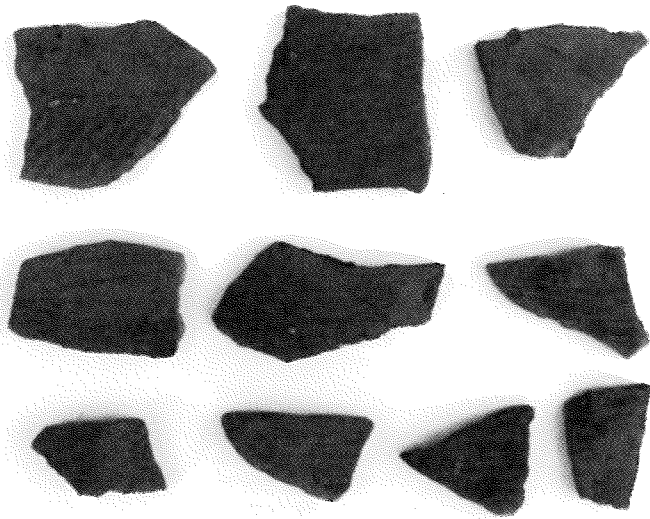
「百蓮譜」のうち「玉繡蓮」

最近の発掘調査

沖積低地で新たに

弥生土器を発見！

片町三丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦

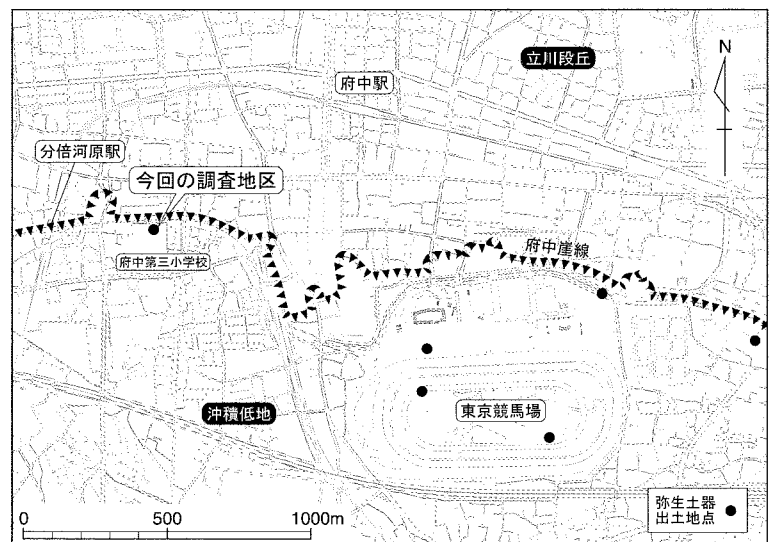


今回は市内で新たに発見された弥生土器を紹介します。発見場所は京王線・JR南武線分倍河原駅の東にある市立府中第三小学校の敷地内です。同校は府中崖線近くの沖積低地にあり、ここでの発掘調査によって10点の弥生土器が出土しました。発見された土器はいずれも小破片ですが、縄文や条痕文が施されており、その特徴などより、弥生時代前期から中期前葉頃のものと考えられます。

これまでに市内で発見された弥生時代の遺跡は、日吉町にある東京競馬場とその周辺部の地域に限られていました。この地域では、弥生時代前期と前期末葉から中期前葉にかけての集落跡、後期の土器などが発見されています。二つの時期の集落跡からは、竪穴住居跡は確認されていませんが、土器と石器が集中して出土した場所があり、その部分が居住の痕跡と考えられています。また、前期の集落跡では、居住域に隣接して再埋葬（遺体の埋葬後に骨を取り上げ、その一部を土器に納めて、これを再び土坑に埋葬する墓制）を伴う墓域が存在し、この時期の集落構造の具体的な姿が都内で初めて明らかになっています。

今回、第三小学校で発見された弥生土器は、表土から出土したもので、この弥生時代の遺構は確認されませんでした。あるいは東京競馬場で発見された集落跡の土器のように、本来は居住域に集中的に分布していた土器が、後世の土地利用などによって拡散したものなのかも知れません。

市内では沖積低地を中心とする場所に、未発見の弥生時代遺跡が少なからず眠っていると考えられます。今後の市内沖積低地での発掘調査の進展によって、弥生時代の府中の姿が一層明らかになることを期待しましょう。



第三小学校と市内弥生土器出土地点

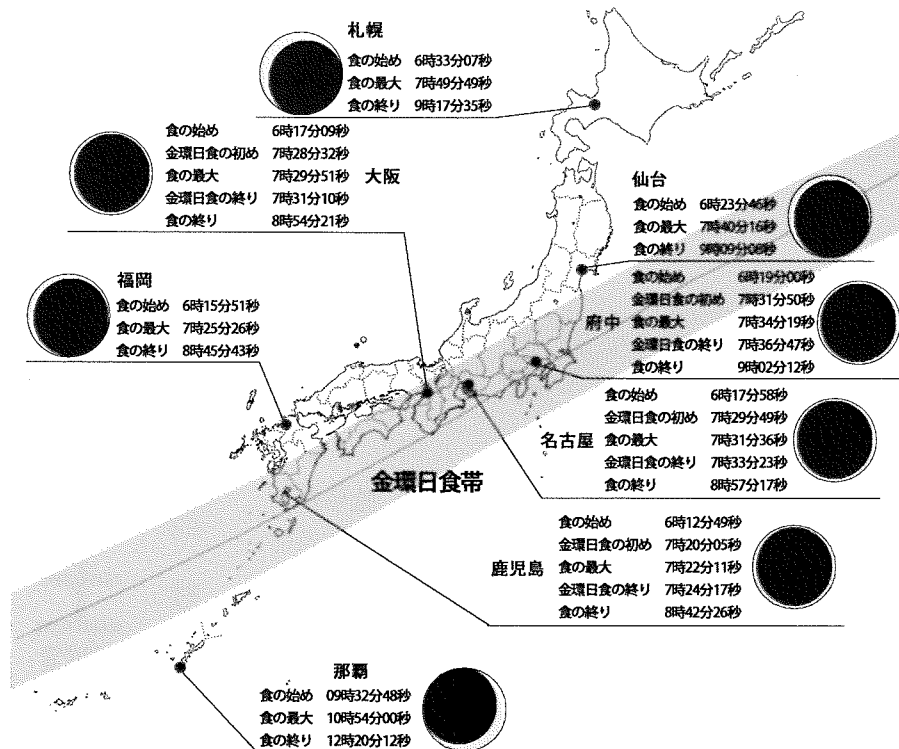


図 2012年日本各地での金環日食・部分日食の様子

▼はじめに

2012年5月21日九州南部から関東まで日本列島を西から東に金環日食帯が通ります。その地域では金環日食となり、輪のような太陽を見ることができのです。また、それ以外の地域でも太陽が大きく欠ける部分日食となります。

府中を含めて首都圏で前回起きた金環日食は、江戸時代後期、173年前の天保10年8月1日、今の暦に直すと1839年9月8日のことでした。日食とはどういったものか、1839年、2012年の金環日食について紹介します。

▼日食とは

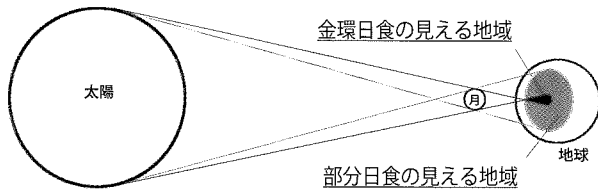
地球は太陽の周りを1年かけてまわり、月は地球の周りを約29.5日でまわっています。そのおかげで、月は満ち欠けを繰り返し、この周期を1か月とした暦が生まれました。ちょうど太陽方向に月がある時を朔といい7日後に上弦の月、ちょうど太陽と反対の方向に来た時を満月（十五夜）、その7日後に下弦の月、そしてまた朔に戻り新しい月がはじまります。

日食は太陽が月に隠される現象なので、ちょうど朔に起きます。しかし、朔のたびに日食になるわけではありません。これは、地球の通り道である黄道面に対して月の通り道である白道が傾いているためです。日食が起こるのは、白道と黄道面が重なる部分付近で朔になった場合だけです。この時に、太陽・月・地球がほぼ一直線上に並びことになり、日食が起こります。

また、月食も同様の事情で白道と黄道の交点付近で起こるため、日食が起こる前後あるいはどちらかの満月で、起こることが多いのです。例えば、2012年5月21日の金環日食の直後の満月の日は、部分月食となります。

▼部分日食・皆既日食・金環日食

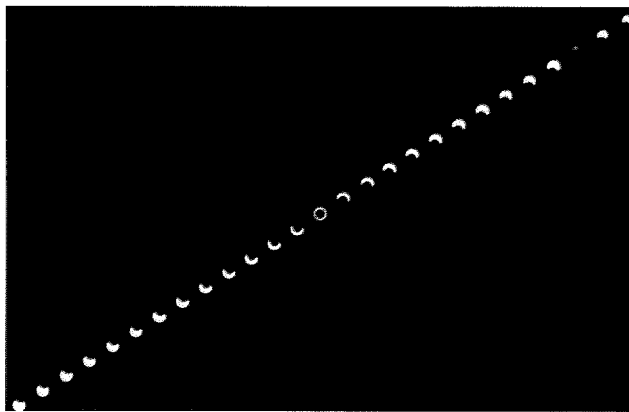
日食には、一部分だけ欠けて見える部分日食、太陽全面が月にすっぽり隠される皆既日食、太陽が丸い輪の見える金環日食の3種類があります。右頁の図の濃い部分の月の影を本影と言い、本影に入る地域で皆既日食あるいは金環日食が見られます。皆既食と金環食を合わせて



中心食ちゅうしんしょくと言い、これらの現象がみられる帯状の地域を中心食帯と言います。

薄い部分の月の影、太陽・月の内接線ないごっせんによってできる影は、半影はんえいと言い、ここに入る地域では、太陽が一部月に隠されるため部分日食が見られます。中心食帯に近い地域ほど食分しょくぶんすなわち欠け具合が大きくなります。

皆既日食と金環日食の違いは、月の軌道きどうが楕円であるため、地球との距離が変わり、その結果見かけの大きさが変わることによって起こります。地球に近い時は太陽より大きく見え皆既日食が、遠い時には太陽より小さく見えるため金環日食になります。



1987年沖縄金環日食の連続写真 写真撮影：大越治氏

▼1839年9月8日の金環日食

この時の様子は、幕府天文方てんもんがたの浅草天文台をはじめとする観測記録が残されていて詳細を知ることができます。浅草天文台での実測値は、欠け具合が最大となる食甚しょくじんが5時50.2分、食の終わりが6時58.8分とあるので、金環日食になる直前に日の出を迎え、東の空の低いところで金環食となり、約1時間後に食が終ったことがうかがえます。

▼2012年5月21日の金環日食

金環日食が見られる中心食帯は、中国南東部の海岸から始まって台湾の北端をかすめ、日本

から太平洋北部を通してアメリカ西海岸、アメリカ南部中央で終わります。日本では、トカラ列島で7時16分過ぎに始まり、九州南部、四国中・南部、近畿、東海、甲信、関東、そして福島県の南相馬なつまで7時39分過ぎに終わります。

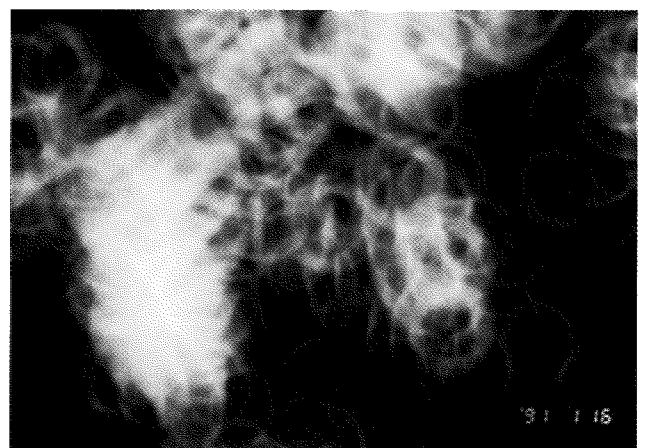
府中では、6時19分に欠け始め、7時31分50秒に金環食が始り、7時34分19秒に食の最大を迎え、7時36分47秒に金環終了、9時2分12秒に食終了になります。府中は、中心帯の中でも中心線に近いので、金環食の継続時間も5分近くあります。

▼日食を見よう！

太陽は、とてもまぶしく肉眼での直視は厳禁ですし、ましてや双眼鏡や望遠鏡等で見るのは危険です。安全に見るための工夫が必要です。

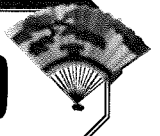
最も簡単な方法は、こもれびのある場所を探して観察することで、金環食中だと下の写真のように見えます。少し本格的に見るとなると、道具が必要になってきます。例えばピンホールカメラと同じ原理で見ることができます。一番簡単な方法は、厚紙に小さな穴をあけて、太陽と垂直に紙をセットし、影に映った太陽を見ることです。小さな鏡で、遠くの壁に映しても同じように見ることができます。ちなみに、江戸時代の天文学者で、初めて国産の暦を作成した渋川春海しぶかわはるみは、ピンホールの原理を利用して日食を観測していたようです。

また、直接見るためには日食グラスが必要です。2009年の日食でもそうでしたが、直前は品薄で入手できないこともありますので、お早めに入手されることをお勧めします。



金環日食時のこもれびの様子 写真撮影：大越治氏

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物



① 矢島藤八郎

私の名前をどこかで見たような、と思ってくださる方がおられたら、それはおそらく親父の藤助のことでしょうな。

親父は、あの川崎平右衛門定孝さんがまだ押立村の名主で、將軍吉宗様から「武蔵野新田世話役」に任命された頃から、岐阜一帯の美濃国での治水対策など代官としての手腕を振るわれる間ずっとお手伝いをした者です。御同輩の高木三郎兵衛さんが『御代官川崎平右衛門様発起書(高翁家録)』という文書でその間の出来事をいろいろ書き遺しておられるので、親父の事もかろうじて皆さんのお耳に達してあるのです。

もっとも親父は、勘定所の御役人に同じ藤助という名の方がおられたので、惣介と名を変えておりました。美濃国に居った時の書類には代官所手代として「矢嶋惣介」と署名がありますし、我が家の系図にも惣介と記されております。

親父は宝暦12年(1762)6月に逝ったものですが、残念ながら、平右衛門様が名代官として、石見国大森代官所に赴任し、石見銀山の経営も建て直されて、最後は勘定吟味役になり、諸国銀山奉行を兼ねて命じられるというますますの出世は存じ上げませんでした。

とは言うても、平右衛門様もこれらの職をお請けになった矢先に亡くなられてしまわれた。大森代官の跡役に任ぜられたのはご子息の市之進殿で、父上の敷かれた石見銀山建直し策を押し進められたのです。何故私がこのあたりの事情に詳しいかと申しますと、実は親父の後継ぎとして代官所の手代を勤めておりましたのです。

そもそも私の家は、武蔵府中の番場宿、後の世では宮西町と言うそうですが、その古い一族の一軒です。親父は、いろいろな大名も教えを乞うたという学者、府中善明寺を再建した依田伊織さんを師としておりました。余程私淑いたしたものでしょうか、親父の戒名にはこの方の号「徧無為」の文字が入っております。

この方と川崎家は親戚関係でもありましたか



矢島藤八郎肖像画 明治14年 矢島進氏蔵

ら、平右衛門さんをお手伝いするようになったのもこのあたりがきっかけかもしれません。

さて上の肖像画、私でございます。亡くなって100年近くたってから描いてもらったものですが、子孫にでも似せたものでしょうかねえ、なかなか好男子でございます。刀も大小描かれております。代官所の手代はその職にある間だけ二本差しが許されました。学もありそうに見えましょう。

親父の例からも分かりますように、それなりの教育は受け、武士の出でなくとも、代官所の職をきっちりこなすだけの能力が私共上層の農民たちには備わっておりました。

私共は、代官所という幕府の出先役所でお勤めしてはありますが、徳川家に仕官しているわけではございません。代官が個別に雇いますので、その方に任地替えがあれば付いて行ったり、代々勤めたりもいたしました。その間に主の方も代替わりされることもあります。

市之進殿も石見の銀山と奥州福島先の桑折代官を兼ねるなど幕府に重用されましたが、50歳で早死にされました。跡はまだ若い平右衛門定安さんが継いで石見大森代官となられたので、私は引き続き10年程お仕えしました。ようやく彼が一人前になれそうなのを見届け、天明6年(1786)、府中から遠く離れた石見銀山の麓、大森の陣屋で永い眠りについたのでございます。

最近子孫が蔵の中からこの絵と家系図を引っ張り出して陽の目を見せてくれたものですから、こんなお話もできたということです。

(馬場治子)

平成22年度
寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者	資料名	分類	数量	受入
1	横山 節	府中市高倉塚古墳採集品等	考古	一括	寄贈
2	大野忠一	金銭登録機	民俗	1点	寄贈
3	平岡正之	オープンリールテープレコーダー	民俗	1点	寄贈
4	土方勝行	桑切り機	民俗	1点	寄贈
5	高澤 登	トランジスタラジオ ちゃぶ台 他	民俗	7点	寄贈
6	遠藤 晃	ドジョウ用ドウ	民俗	1点	寄贈
7	中村長平	消防半纏 消防服	民俗	2点	寄贈
8	島田美恵子	揚羽蝶紋柄鏡 高砂文字入り柄鏡	民俗	2点	寄贈
9	坂本正男	磁石式壁掛電話機	民俗	1点	寄贈
10	谷口健一	国鉄下河原線東京競馬場 前駅駅名看板 他	民俗	6点	寄贈
11	谷口健一	鉄道、劇場等切符	民俗	一括	寄贈
12	古田勝良	オープンリールテープレコーダー 他	民俗	25点	寄贈
13	大室容一	鬼瓦	民俗	1組	寄贈
14	鈴木一治	旧彌宜村くらやみ祭関係 資料	民俗	一括	寄託
15	山元美和子	大政翼賛会及び愛国婦人 会等関係資料	歴史	26点	寄贈
16	中村長平	工匠関係典籍	歴史	15点	寄贈
17	小川小枝子	朱書 府中宿絵図	歴史	1点	寄託
18	相馬尚教	広楽江都往来 他	教育	12冊	寄贈

★「あるむぜお」は定期購読できます！★

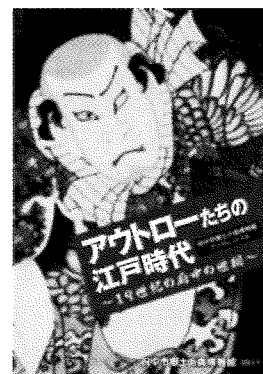
「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。4回分の送料320円（切手でも可）を添えて、受付カウンターでお申込みください。

平成22年度
利用状況

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数306日	大人	159,760	6,618	44,966	211,344
	子供	28,091	20,322	54,165	102,578
	小計	187,851	26,940	99,131	313,922
上記のうち プラネタリウム観覧者 投影日数295日	大人	36,100	2,146	5,844	44,090
	子供	13,912	9,537	5,144	28,593
	小計	50,012	11,683	10,988	72,683

＊新刊案内＊

- ＊『府中市郷土の森博物館年報』24号
平成21年度の事業報告です。 300円
- ＊『府中市郷土の森博物館紀要』24号
学芸員他による研究報告・論文集です。 400円
・府中市沖積低地における縄文・弥生時代の遺跡
[湯瀬禎彦]
・国府八幡宮の中世瓦 [深澤靖幸]
・川崎平右衛門定孝による玉川上水及び多摩川の治水
工事 [野田政和]
・鉄仏の来歴と畠山重忠の伝説 [小野一之]
・府中市内稲荷の「創建」と「勧請」
—鎮座起源の伝承と歴史— [佐藤智敬]
- ＊『府中市内家分け古文書目録14 四ッ谷土方平右衛門
家文書目録』
府中市内に残る古文書の目録です。 200円
- ＊『府中市郷土の森博物館ブックレット14』
府中市域に残る資料を中心に、博徒・盗人・囚人
などのアウトローという存在をとあして、江戸時
代の社会を紹介します。 700円



アウトローたちの江戸時代
〜19世紀の府中の世相〜

＊新刊は、本館1階ミュージアムショップにて発売中です。



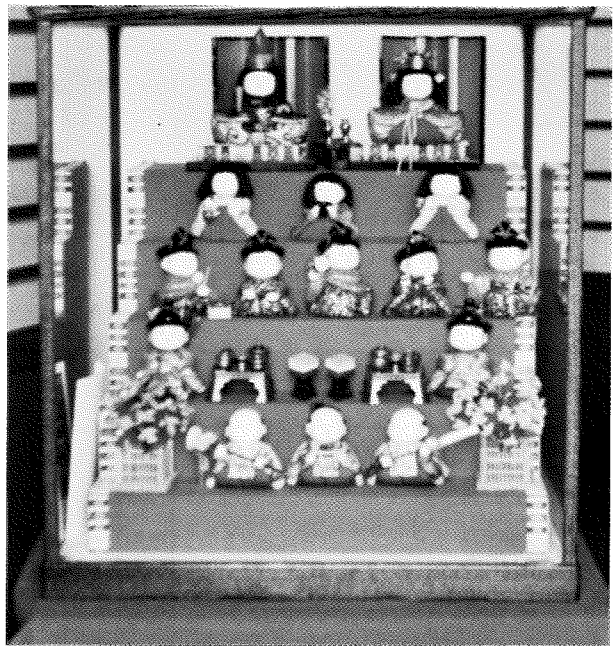
毎年3月3日は桃の節句（上巳の節句）と呼ばれ、女の子のいる家庭ではひな祭りが行われます。それにちなんで、毎年郷土の森博物館で2月～3月上旬に、歳時記展として復元建物でひな人形を飾っているのをご存じでしょうか？博物館ボランティア資料整理班の協力を得て、旧島田家住宅（薬屋）、旧矢島家住宅（郵便取扱所）のスペースを利用して、府中市域で飾られてきたひな人形を、可能な限り飾っています。

とはいえ、ひな人形は、一組の人形数も多く、ひな壇や什器などを含め収蔵空間を必要とします。博物館も広大な敷地があるとはいえ、資料の展示および収蔵スペースは限られます。そのため、最近ではひな人形寄贈の申し入れがあっても、市内使用、来歴がわかっている等受入条件をクリアしても、同種のものがある場合や収蔵スペースの関係でお断りすることもあります。そんな中で、今回久々にひな人形を受け入れることにしました。これまで収蔵していなかった種類の、通称「団地びな」です。

ひな人形にもさまざまな形式があります。そもそもひな人形は一对の人形をかざるだけの土地も多くありますし、紙で人形をつくって川に流してしまう地域もあります。府中市域では近代以降、三人官女や五人囃子の計15体の人形を配置し、畳二畳ぶんはありそうな5段以上のひなかざりを飾る家がありました。これまで寄贈を受けている大正以降に府中市域でかざられた人形は、いわゆる「お内裏さま」と「おひなさま」カップルを中心に、三人官女、五人囃子が付属し、弓矢を持った随臣二人と掃除用具を持った仕丁と呼ばれる三人がセットで、そのほかにも什器類などの付属品をあわせ、五段～八段の壇に並んでいるものが一般的のようです。

しかし、部屋が広くなくてもひな人形をかざることができるように、と工夫されたものが登場します。それが今回紹介する団地びなです。

写真の団地びなは、ケースの高さ52cm、幅と



奥行きは47cm程度と、一般的な壇飾りにくらべて非常に小さく、半畳ほどの広さがあれば問題なく飾ることのできる大きさです。そしてそれだけ小さいものでありながら、きちんと15体の人形によって構成され、什器もそろっています。通常のひな人形にくらべ二頭身で頭が大きい印象です。団地のような、居住空間が一戸建てに比べれば広くない家に住む人用にと考えられたと思われ、昭和30～40年代に流行し日本各地で購入されたようです。大きさこそ違いますが、女の子の生まれた家でひな人形をかざる、という伝統を維持しつつも、時勢に応じてその内容が変化していることを示す一例と言えるのではないのでしょうか。

ひな人形は時代や流行、地方の文化によってさまざまな形に発展、伝承されてきました。当館にも、ひな人形が御殿に入った御殿びなや享保期（1716～36）頃に流行した形式を模したという享保びななど多種の人形が収蔵されています。その中でも昭和期のひな人形事情史を語り、見た目も可愛いこの団地びなは、いずれ歳時記展でもご紹介したいと思っています。

（佐藤智敬）